

国語〔問題〕

(100点・90分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見たり、裏返したりしてはいけません。
2. この問題冊子は27ページあり、解答用紙は1枚(両面)です。
試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁などに気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 試験開始後、ただちに解答用紙の所定記入欄に、氏名・受験番号・誕生日をそれぞれ正しく記入し、さらに受験番号・誕生日をその下のマーク欄にマークしなさい。
4. 受験番号・誕生日が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙の解答欄に各設問で指示された方法で記入しなさい。
マーク方式は、例えば、

20

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号20の解答欄の②にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
20	① ● ③ ④

6. 問題冊子の余白等は、下書きなどに適宜利用してよいが、各設問で指示された解答は、必ず解答用紙の解答欄に指示された方法で記入しなさい。
7. 試験終了後、提出は解答用紙のみとし、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が「環世界」という概念と出会ったのは、十九歳の頃、ヤーコプ・フォン・ユクスキュル（一八六四―一九四四）晩年の著『生物から見た世界』を読んだことがきっかけである。以来十五年間、事ある度にこの本を開き視点を変えて読み直してみるが、未だに発見は尽きない。今回は、生物学史的な視点から『生物から見た世界』を読んだ場合の気づきを端緒に資料を探ってみた。

1

『生物から見た世界』では

A

、つまり環世界が紹介される。その中でもイヌの環世界を取り上げた研究内容は際立って異質な印象を受ける。というのもそれらは「人間と動物のコミュニケーション」を目的とする環世界論の実践的应用研究だからだ。

いったいどのような動機でイヌの研究は実施されたのだろうか。ユクスキュルの発表した論文を調べてみると、一九三二年一〇月に発行された研究ジャーナル『イヌ研究』に「イヌの環世界」と題した論文を投稿していた。そこで本報告では「イヌの環世界」を手がかりに、イヌの環世界研究の背景とその具体的な内容に迫った。

イヌの環世界研究の拠点となったのは、ユクスキュルが所長を務めたハンブルク大学附属の環世界研究所である。まず注目すべきは、環世界研究所は、ユクスキュルの研究人生において、おそらくは最も自由かつ独創的、生産的な共同研究の場であつたということである。

環世界研究所に所属する以前のユクスキュルといえば、一八九二年から一九〇二年の間、主にナポリ（イタリア）の臨海研究所にて研究員としてクラゲやウニ、ヒトデなど、海棲動物の生態の研究を行っていた。ところが、一九〇五年の日露戦争直後のロシアコクサイの紙切れ化によって破産状態となったユクスキュルは十分な実験環境を確保することが難しくなる。この事態がケイキとなり、ユクスキュルはカントの認識論の検討とそれに基づく新しい生物の理論、つまり環世

界論のベースとなる理論構築に専念するようになる。その結果は、ユクスキュルの主著の一つである『理論生物学』にまとめられた。

^c ザイヤ研究者としての長い期間を経て、一九二四年にハンブルク水族館の館長に任命されたユクスキュルは、その後『理論生物学』で固めた理論を構想の根幹とする独自の実証研究を開始し、さらには研究の場づくりにも才能を発揮していく。一九二五年、六十一歳にしてハンブルク大学の科学助手として人生初となる大学の有給ポストを得た。そして翌年、いよいよハンブルク大学附属の環世界研究所（旧「ハンブルク水族館」）の所長として研究所の運営に携わると共に、再び動物の研究を精力的に行った。環世界研究所にはさまざまなバックグラウンドを持つ研究者が集い、生物の環世界をテーマとする多様な研究活動が盛んに行われた。なお、『生物から見た世界』で紹介される研究の多くはこの環世界研究所の成果である。

2

さて、なぜ環世界研究所はイヌの環世界の研究に取り組むことになったのか。当時のドイツの社会事情と環世界研究所の研究体制から推測するに、以下二つの事情が主要因として挙げられる。²

^d 第一に、環世界研究所が活発に研究を行っていた時期は、ちょうどドイツの「盲導犬育成事業」が盲導犬の育成方法をモサクしていたということがある。一九一四年に勃発した第一次世界大戦は多くの失明軍人を生んだ。失明軍人の社会復帰をサポートする盲導犬の活躍が国家的に期待されていたわけだ。盲導犬の育成とは、目が見えない人の頼れる生活のパートナーとしてのイヌを人間が育てることである。そのためにはイヌに対する擬人化をやめ、イヌから見た世界というものを科学的に理解しようとしなければならないだろう。その上で、実際の生活場面において、イヌの環世界と人間の環世界の間で円滑なコミュニケーションが行われることが望まれる。そこで、環世界研究所に求められたのが、新しい盲導犬訓練方法の開発だったわけである。ただし、ドイツの盲導犬事業と環世界研究所が一事業としてどれほど密接に連携していたかは不明である。

第二に、上記のようなドイツの盲導犬育成事業からのニーズがある中で、心理学者ザリスが一九三一年より環世界研究所でイヌを対象に研究を始めたことは大きい。イヌの環世界の研究を主導する人物が現れたのだ。ザリスは「イヌの言語理解」をテーマに博士論文を書き、また第一筆者としてユクスキュルと共にイヌの環世界や盲導犬の訓練方法などをまとめた数本の論文を残している。環世界研究所でザリスがイヌの研究を開始してから数年という短期間で成果が出ていることから、ザリスのイヌの言語理解への関心・目的とユクスキュルのサポートはうまく噛み合ったに違いない。結果的に、二人が環世界の視点から開発した盲導犬の訓練方法は、ドイツの盲導犬訓練学校で人気をハクし、定着していった。

環世界研究所が盲導犬訓練への応用研究を行う場として社会的信頼を獲得できた理由は、「イヌの環世界」の導入においてユクスキュルが綴った問題設定と信念に集約されるだろう。

人間とイヌは何千年もの間生活を共にしてきた。人間と生活を共にするあらゆる動物の中で、イヌほど身近な存在はいないだろう。人は昔から、イヌに人間の特性を学ばせようとするだけでなく、イヌの心に自分の姿が投影されることを喜んできた。こうしたイヌの印象は、人間には非常に都合のよいものであることが分かってきた。もし人間がイヌの世界でも重要な役割を果たしていると主張したいのなら、少なくともイヌの世界を知ろうと努めなければならぬ。しかし、これには全く注意が払われていない。「イヌは人間と同じ世界に生きている」という考え方が、当たり前のようにまかり通ってきたわけである。

イヌが我々と同じ世界に生きていると本当に言えるのだろうか。いや、イヌの個体の世界、つまり、その個体が知覚し、働きかける環世界は、そのイヌだけが所有している。イヌの環世界の特殊性は、これまで取り組まれてこなかった問題なのだ。

目の見えない主人を目的の場所まで安全に誘導することは、盲導犬の重要な仕事の一つである。この仕事の難しさは、本来「障害物ではないもの」に関心を向け、かつ、主人にその存在に気づかせるなり、うまくそれらを主人が避けるようイヌ自身が自主的に行動しなければならない点にある。盲導犬の訓練において重要なことは「主人の関心領域をイヌの環境に意図的に埋め込んでいくこと」である。そこで、ユクスキュルとザリスが開発したのが「盲導犬訓練用の荷車」だった。この荷車は、盲導犬がハーネスをつけて訓練をする前段階のステップとして用いられた道具で、盲導犬にとってはこの荷車を引くことが、実際に主人と一緒に歩く場面を想定したシミュレーションとなった。

荷車の高さは人間の平均身長ほどで、横幅はハーネスをつけて人間と一緒に歩く際に注意すべき範囲を設けている。イヌが荷車を引いて歩くと、通常たやすく通れる道も、荷車が色々などところにぶつかったり、溝に落ちたりすることによって不快な情動と共に不快に感じたシーンや光景の情報など次第に学習していく。荷車を引いて色々な場所を歩く経験を積むことで、避けるべき「障害物」がイヌの環境の中で更新されていくわけである。

もう一つ、重要な研究が「指示（コマンド）」を用いた訓練方法の開発である。ユクスキュルは「イヌの環境」の中で、イヌのトレーニングの難しさは、人間のサインと関連付いた記憶スキーマをイヌの環境の中に新しく形成させることだとしている。要は、優れた盲導犬ほど、主人と共有する環境にあるモノはそれぞれ細かく意味的にカテゴライズされており、かつその意味的カテゴリーは主人が発するコマンドや振る舞いに関連づけて学習されている。

人間の場合、言語によって環境内のモノを細かく分節化したり、カテゴライズしてそれぞれに異なる意味を割り当て、記憶している。対するイヌの場合、本来は言語と視覚的な情報を関連付けて学習しているわけではないことに我々は注意しなければならない。例えば、もし飼い主が部屋の中にある椅子に座りたい時、理想的には「椅子」と指示を出せば、盲導犬が自らの判断で目的の椅子の上に座って椅子の場所を教えて欲しい。しかしながら、そう簡単にはいかない。ザリスとユクスキュルによる研究によれば、「椅子」と指示を受けたイヌは、部屋の中で視界に入ったもののうち、座る行為を

アフォードするエリア（座るトーン）のあるエリア）を発見し、当然のように座ってしまふ。ユクススキュル的に表現すれば、イヌは「椅子」という指示があると、「椅子」ではなく（座るトーン）を探しにいくのである。我々でさえ、ちょうどいい形状の丸太や岩があれば座ることがあるのだから、イヌからすれば何が「椅子」で何が「椅子ではないモノ」か、人間と同じような形式で識別するのは容易ではない。主人が「靴」と言えば、靴の特徴に似た要素を持つスリッパやリモコンに（運ぶトーン）を発見し運んでくるかもしれないし、「コップ」と言えば、花瓶や鍋を運んでくるかもしれない。イヌの飼い主に求められるのは、こうしたイヌの特性を理解すると同時に、イヌとの共同生活で行われる双方のやりとりの中で、イヌが環境中に与える意味の種類を増やすための行動・コマンドの一貫性、粘り強い継続性である。

4

最後に、盲導犬訓練方法開発における機能環モデルの応用について言及しておきたい。ユクススキュルの最大の功績は、生物学に「主体」の概念を導入したことである。生物における主体性が学術的に議論されるためには、あくまで生きた生物が客観的に観察され、分析・記述される科学的アプローチでなければならぬ。そこでユクススキュルが考案したモデルが「機能環」だった。とりわけ動物は、感覚器官を介して周囲環境から状況に応じて必要な対象を知覚し、その対象に対して一定の反応をすることによって生存に必要な行動をとる。この動物主体と対象を連結する **B** 世界と **C** 世界の **D** を機能環と呼ぶ。例えば、蚊は動物の匂いを触覚で感じ取り、匂いが流れてくる方向にハネを動かし飛んでいくことで、エサである動物の血に確実に近づいていく。動物はただ機械的に運動しているわけではなく、**B** 世界と **C** 世界の **D** （機能環）を操る主体として、常に与えられたものに種固有の意味のフィルターをかけて生活していると考えることができる。環世界とはいわば機能環の総体なのだ。

機能環を有するという点で人間とイヌが共通していることに注目してみる。すると、両者の機能環を連結させた時に、両方の機能環がうまく噛み合い、一つの目的のために機能することが人間と盲導犬の間のコミュニケーションにおいて重要であることが判明する。そこでユクススキュルとザリスは二種類の機能環（二種類の環世界）を連結させたモデルを念頭

に置きながら、盲導犬訓練の開発と実践に取り組んだ。

イヌは人間の環世界の中に存在し、人間もまたイヌの環世界の中に存在する。それらは見かけの姿・行動が反映された主観的現象であって、両者の内的世界はお互いに直接確認することはできない。両者の環世界を接続するのは、機能環によって生成される〈意味〉である。例えば、あるイヌが通りすがりの人を〈敵〉だと認識し、吠える。イヌに吠えられた人は〈危険な対象〉とし、とっさに棒を振り上げる。この時、もしこのイヌが過去に振り上げられた棒で殴られたりするなど、危険な目にあった記憶が残っていると、そのイヌは逃げるのと同時に吠えるのをやめる。あるいは、振り上げられた棒によって危険な目にあったことがなければ、逃げることはなく、吠え続けたり、噛み付いたりするなど攻撃を仕掛けていく。このように、状況に応じた特定の機能環を介して両者の環世界は接続され、ある種の異種間コミュニケーションを共同で作り上げる。ということは、人間の目的とうまく重なる機能環をイヌの環世界に無理なく組み込むことが、盲導犬訓練の本質的な課題として設定することができるだろう。そして、イヌと人間とのより良い共生を目指す上で、ユクスキウルが最重要事項として主張したのは、

E

だった。

（釜屋憲彦「イヌの環世界」による）

注1 カント……イマヌエル・カント。哲学者（一七二四―一八〇四年）。

注2 ハーネス……リードなどをつなぐために犬の胴体に装着する道具。

注3 スキーマ……これまでの経験などをもとに構造化された知識や枠組み。新たな情報を受け取るとき、この枠組みに照らして意味づけや理解が行われる。

問一

線部 a ～ e のカタカナを漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号は a

1

・ b

2

・ c

3

・ d

4

・

e

5

。

問二

空欄

A

に入れるのに最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

6

。

- ① 色々な動物が周囲環境に意味づけ構築する主観世界
- ② 人間と動物のコミュニケーションを目的とする世界
- ③ 生物学史的な視点から見えてくる動物の客観的世界
- ④ 人間の構築する世界とは異なる、イヌに特有の世界

問三

線部 1 「おそらくは最も自由かつ独創的、生産的な共同研究の場であった」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

7

。

- ① 海棲生物を対象とした独自の研究を行なっていたことが起点となり、後に水族館でポストを得ることができたため。
- ② 自国の敗戦により十分な実験の継続ができなくなったものの、そのおかげで理論研究に舵を切ることができたため。
- ③ 研究の場づくりにも才を発揮し、自身の理論の実証実験に独力で従事でき、多数の成果を挙げることができたため。
- ④ 異分野の研究領域の人々との交流が実現され、その異種混濁こんどうな場において環世界かんせかいに関わる学際的な研究をできたため。

問四 ―線部2「二つの事情」とあるが、これらの事情の説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ

選びなさい。解答番号は 8。

① 環世界研究所とドイツの盲導犬育成事業の明確な社会制度的なつながりから、戦争による多くの失明軍人をサポートするための国家政策としてユクスキュルに期待がかかったことと、それとともに人間とイヌの環世界の相互理解に資するイヌの言語理解を推進する同僚の存在があったため。

② 環世界研究事業に係る国家的な要請を受け、一九三〇年頃から、環世界研究所がイヌの生物学的特徴に着目した研究を進めるようになったことと、その同時期に、「イヌの言語を理解する」という心理学的なテーマを、盲導犬訓練法の開発に活用しようとする研究所の関心と噛み合ったため。

③ 盲導犬の訓練方法についてのザリスとユクスキュルの関心が一致しており、環世界研究所において、盲導犬を対象とした協働的な研究成果がまとめられていたことと、それらに加えて、イヌに対する擬人化ではなく、イヌから見た客観的な世界を科学的に理解していくことが望まれたため。

④ 「イヌが言語をどのように理解しているのか」を研究する心理学者とユクスキュルとが協働し、イヌを対象とした学術的な活動を始めることができたことと、この頃、失明軍人の社会復帰を支援する盲導犬の育成が国家的な課題となり、環世界研究所が新たな訓練法の開発に着手したため。

問五

——線部3「社会的信頼を獲得できた」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 9。

① ユクスキュルは、イヌの擬人化を排し、イヌ固有の環世界の科学的な解明に重きを置いていた。そして彼の信念のもと開発された新たな盲導犬訓練法は、ドイツ国内において既に定着しており、環世界研究所はその応用研究を行う場となったため。

② 環世界研究所は、人間が自身の感情や思考などを無意識のうちにイヌに映し出してしまうという発想に警鐘を鳴らしていた。それとともに、「イヌは人間と同じ世界に生きている」という理解をイヌは所有していないという信念を持っていたため。

③ ユクスキュルらは、イヌの個体を持つ主体的な世界を重要視していた。さらにユクスキュルらは、イヌと人間との円滑なコミュニケーションを実現させるためには、人間側がイヌの世界を知ろうと努めることが必要であることを明らかにしたため。

④ 環世界研究所は、盲導犬訓練におけるイヌの環世界と人間の環世界の相互性の研究に取り組んでいた。この研究で見られた、イヌの環世界での知覚を尊重し実践に応用するという研究所の偏狭な姿勢が、盲導犬育成事業における評価を高めたため。

問六

——線部4「『指示（コマンド）』を用いた訓練方法」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 10。

① イヌの自然な言語理解能力を重視し、人間が発する声や身振りといったサインをそのまま理解させることを目的とする訓練方法である。したがって、それぞれの環境においてイヌが学習できるように、モノを細かく意味的に区分した学習方法をとる。

② 失明した人間のかわりにイヌがモノの名称や用途を知覚し、それらを空間や状況に対応させて認識・判断できるようにする訓練方法である。この訓練では、イヌが言語的な意味の違いを論理的に理解し、それを行動に反映させることが期待される。

③ 人間とイヌとが共生していく場面において、イヌが生活環境内のモノを細かく分節化したり、カテゴライズしたりしてそれぞれに異なる意味を割り当てて記憶するよう、正しい反応に報酬を与えながら継続的に指示をしていく訓練方法である。

④ 言葉やジェスチャーといった人間が用いるサインと、それによって指し示される事柄との関連をイヌの環世界に形成する訓練方法である。人間の用いるサインと意味的カテゴリーの関連は、イヌにとっての自然な知覚とは異なるため、その訓練は難しい。

問七 — 線部5「座る行為をアフォードする」とあるが、この説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから

一つ選びなさい。解答番号は 11。

- ① イヌが環境内の物体の形状や位置などを視覚的にとらえ、そこに「座れる可能性」を見いだすことを示しており、このときイヌは、「座る」という言葉の意味ではなく、身体的に座ることができる環境の情報を認識している。
- ② イヌが人間の指示によって繰り返し訓練され、特定の言葉と物体との対応を学習し、結果として「椅子」という言葉に対する意味的なカテゴリーを理解した状態を指し、これによって適切に座る行為をとることができる。
- ③ イヌが「椅子」と「椅子ではないモノ」という言葉の社会的意味を人間と同様に識別せずとも、環境の中にある対象物のうち、人間が「椅子」と見なすものだけを選び、そこに正確に座る感覚を持っていることを意味する。
- ④ イヌが「椅子」と「椅子ではないモノ」の視覚的な情報からではなく、音としての「椅子」が指し示す語義的なことがらを理解し、部屋の中で視界に入ったものの中から「座れるところ」を発見することを意味している。

問八 空欄 B・C・D に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選

ばなさい。解答番号は 12。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|---|----|---|---|---------|
| ① | B | 感覚 | — | C | 行動 | — | D | カテゴリー |
| ② | B | 知覚 | — | C | 作用 | — | D | カップリング |
| ③ | B | 経験 | — | C | 記憶 | — | D | モデリング |
| ④ | B | 認知 | — | C | 相互 | — | D | フィルタリング |

問九 空欄

E

13。

に入れるのに最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

- ① 同じ生活空間を共有するパートナーとしてイヌを観察し、変化するイヌの環世界を学び、それにあわせて自身
自身の機能環を調整し続ける人間側の不断の努力
- ② 同じ生活空間を構築する存在であるイヌの行動を記録し、イヌが示すパターンの定量化から、反応を予測し
イヌの行動を制御する仕組みを人間が構築すること
- ③ 同じ生活空間に生きる共生者としてイヌと暮らし、変化するイヌの環世界を学び取ることで、どんな場面でも
正確に反応させる技法を人間側が磨いていくこと
- ④ 同じ生活空間に共在する伴侶種としてイヌの行動特性に着目し、その環世界を再構成して人間の環世界に近づ
けるよう機械的に誘導し、最適化を図る取り組み

問十 この文章は、四つの節から構成されている。本文中の 1 から 4 には、それぞれの節のタイトルが入る。次の

アークのうち、それぞれの節のタイトルの組み合わせとして最も適切なものを、後の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 14。

アドイツの盲導犬育成事業と環世界研究所の制度的つながり

イ 環世界研究所で行われたイヌの環世界以外の多様な研究

ウ 環世界研究所と日本における盲導犬訓練方法との関連

エ ドイツの盲導犬育成事業と環世界研究所の関わり

オ 盲導犬訓練方法開発における機能環モデルの応用

カ ユクスキュルの研究履歴と環世界研究所

キ イヌの環世界研究の内容

ク 二種類の環世界

④	③	②	①
1	1	1	1
イ	カ	イ	キ
2	2	2	2
ウ	エ	ア	ア
3	3	3	3
エ	キ	キ	ク
4	4	4	4
ク	オ	ク	オ

問十一 本文の内容と合致しないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

① ユクスキュルは、「環世界」という概念を通じて、動物それぞれが主観的に世界を知覚し行動していることを示した。彼は、イヌの環世界を理解し、人間との機能的な接点を見出すことが盲導犬訓練において重要であるとし、実際に環世界に基づく訓練法の開発をザリスとともに推進した。

② イヌは人間の言語を視覚的な環境情報と結びつけ、たとえば「椅子」と言われれば人間と同じようにその語が意味する対象を特定し、ふさわしい行動をとる。したがって盲導犬も、「椅子」や「靴」などの語を指示として受け取れば、それらを的確に区別し主人の意図に応じた行動ができる。

③ イヌの環世界においては、例えば「障害物」として意識される対象は初めから備わっているわけではない。ユクスキュルによれば、訓練用の荷車を用いることで、イヌもまた人間の生活環境における注意すべき範囲を経験的に学習し、自身の環世界を更新していくことができるようになる。

④ 機能環とは、動物が感覚器官を通じて環境から意味ある情報を知覚し、それに即した反応をとる一連の過程である。この知覚と行動の連鎖によって、動物は環境との関係性を築き上げていき、さらには各個体に特有の経験や学習もまた、この機能環の働きに大きな影響を与える可能性がある。

第二問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「災後」ではなく「災間」は、二〇二〇年前後からはじまった新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）の流行についてもいえます。流行がはじまってすぐに盛んに論じられたのは、「ポスト・コロナ」の社会はどのようなかという話題でした。はじまったばかりなのに、「コロナ後」の社会に世間の関心は移動していたのです。しかし、これもよくよく考えておいたほうがいいでしょう。そもそも、新型コロナウイルスが災いをもたらしたのは、SARS^(注1)、MERS^(注2)、COVID-19と、すでに今世紀に入って三度目でした。と、考えると、正確には「ポスト・コロナ」ではなく「インター・コロナ」「コロナ間」の社会と呼ぶのが正しかったのではないのでしょうか。

A、感染症がいちどきりで収束していくというよりも、感染症がくりかえしおそってくることを前提として社会のあり方を根本的に考える必要があるといえるのです。「ポスト・コロナ」ではなく、「インター・コロナ」であることは客観的には自明です。しかし、それを「ポスト」と呼んだのは、今後感染症の流行が続いていくだろうということを直視することができず、これを機に社会が大きく（ポジティブに）変わるかもしれないという生半可な期待だけが存在した、その証拠であるような気がします。

「災間」はいつからはじまったと考えるのがよいでしょうか。

私は日本社会においては、阪神・淡路大震災がおきた一九九五年をそのはじまりとみるのがよいと考えています。なぜなら、一九九五年以降、毎年のように災害がおきているということと、それだけでなく、各種社会指標がこのころから変化を示しているからです。**B**、一九九五年以降のおもな災害を見てみましょう。（一九九五年以降のおもな災害」の一覧表は省略）

たしかに一九九五年以降、災害が毎年のようにおきている、というか、一年にふたつも三つも、場合によっては四つも災害がおきていることがわかります。また、九州北部など、一部の地域はくりかえし災害におそわれていることがわかり

ます。

つぎに、社会指標を見てみましょう。（総人口と生産年齢人口の推移）の棒グラフは省略）日本の総人口は二〇〇八年をピークに減少に転じますが、生産年齢人口（一五―六四歳）、つまり労働のおもな担い手で社会ホシヨウ^aを支える側にあるような人びとの数は、一九九五年をピークに減少しています。いわゆる少子高齢化の傾向が本格的にはじまるのが一九九五年なんですね。

日本経済は一九九五年までは右肩上がりに世界経済に占めるシェアを伸ばしたものの、一九九五年を境に低下の一途をたどっています。

これらの事実から非常に重要なことが見えてきます。「災間」といっても、災害が増えていくのは気候変動の影響ですから、地域による偏り^bはあっても、基本は世界共通です。しかし、日本社会は、この「災間」を、さまざまな指標が右肩下がりになる状況のなかで迎えなければならない。ここがとても重要です。災害が毎年のようにおきる、しかも規模も大きく、広範囲にわたる。けれど、それに対応するためのさまざまな社会シゲン^cがどんどん少なくなっていく。日本社会は、非常に厳しい状況で「災間」を迎えなければならないのです。

このような状況が生んでしまう「みんな」²「空気」があると考えています。それがなにで、どのような影響を及ぼすかがこの章で考えたいことです。

そのことを考えるための補助線として、「戦間」のことをふりかえっておきましょう。²「災間」は、「戦間」になぞらえた表現なんです。「戦間」とはなにか、これは第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の、おもにヨーロッパの歴史をさすときのことばで、「戦間期」（一九一九―一九三九）というつかわれ方をします。「戦間期」を生きたヨーロッパの人びとは、まさか自分たちが「戦後」ではなく「戦間」を生きていると思わなかったはず。「いや、そんなこと、『戦後』か『戦間』かなんて終わってみたいとわかんないんだから当然だろ」って、まあそうなんです、ここで確認しておきたいのは第一次世界大戦が人類の歴史にとってどのような意味をもっていたのかなんです。

というのも、第一次世界大戦のあとに、人類のなかにはじめて「戦争はよくない」という考えが出てくるんですね。それまで、戦争は必要とあらば辞さない外交の手段のひとつと考えられていました。ところが、第一次世界大戦は、それまでの戦争にはなかった非戦闘員も巻き込んだ戦争となり、被害の規模もとても大きなものになりました。ここではじめて、戦争はよくない、戦争はやめなにか、という政治的な動きが出てくるんですね。これが国際連盟の発足へとつながってきます。

「戦間期」を生きているとは思わなかったはずだ、というのはこのような意味です。「戦間期」は、まずは人類の連帯へとむかうユートピア的な気分ではじまります。しかし、「戦後」とはならなかった。おもには、ドイツの戦後処理に失敗し、やがてナチスが台頭し、さらに大規模な戦争、第二次世界大戦へといたってしまうんですね。

C、「戦間期」を生きた思想家である、アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci 一八九一—一九三七) のつぎのことを紹介しましょう。「危機はまさに、古いものが死につつあり、新しいものが生まれないという事実にある。この空白期には、もつとも多様な種類の病的な兆候があらわれる」。もはや古い価値や制度は滅びつつある、けれど、新しい状況に向きあうためのたしかな価値や制度がまだ存在しない空白期には病的な兆候があらわれるということです。この病的な兆候が「災間」にもありはしないかと思うのです。

つつがなく続いていた日常が、あるとき断絶されて一変してしまう、それまでの価値観のままではのりこえることができないうような「空白期」のひとつとして、「死」があるのではないのでしょうか。正確には、「死」を突きつけられたときに、それをいかに受容できるかという問題です。人間はみないつかは死にます。けれど、多くの人は、それを特段には意識せず日々をすごします。

D、ある日、それが宣告されたとして、私たちはどのように「死」をうけとめるのか。キューブラー＝ロス (Elisabeth Kübler-Ross 一九二六—二〇〇四) による有名な「死の受容」の五段階をみてみましょう。

たとえば、がんで余命が一年だと宣告されたとしましょう。最初にくるのは「否認」、「そんなの誤診だ、やぶ医者め」

と、その事実を認めない段階。つぎに、「怒り」、「ろくでもない仕事ばかり押しつけられるからストレスためこんでがんばったんだ!」。そして、「取引」、「なんとか娘がランドセルを背負うころまでは生きられないものでしょうか」を経て、「抑鬱」、「もうどうしようもない、だめだ」。何をするにも手につかず茫然自失状態になってしまいう段階にいたります。

この「抑鬱」にいたると、「死」を避けられないものとして受け入れてはいるのですが、それは、もうだめだという否定的な形式のもとでの話です。キューブラー＝ロスは、この「抑鬱」の先に、「受容」という段階があるんだといいます。「死」を避けられないものとして受け入れているというのは「抑鬱」と同じなのですが、避けられないものだからこそ、それまでの時間を大切にしようとか、自分の死後のことについて準備をしようなどと、「死」について主体的にうけとめることができる段階に人間はたどりつけるんだというんですね。

スラヴォイ・ジジエク (Slavoj Žižek 一九四九) という思想家が、この五段階というのは社会全体にも適用できるんじゃないかといっています。たとえば、気候変動を例にしてみるとどうでしょう? みなさんも、どのようにこの五段階で説明できそうか、考えてみてください。

どうでしょう? たとえば、こうです。「気候変動なんてうそっぱちだ」(否認)、「こんなことになったのも先進国が好き放題に化石燃料を燃やしたせいで、いまさらわれわれにそれを抑制せよなんていうものは身勝手すぎる」(怒り)、「気候変動にもいいことはある、シベリアに広大な農地ができるぞ」(取引)、「もうだめだ、手遅れでなにも打つ手はない」(抑鬱)、そして「気候変動は人類の単位で解決しなければならない問題、もう連帯するしかない」(受容)です。ね。「受容」にいたることができるか、かなり難しそうですが、客観的には気候変動にはそれしか解決策は残されていないのも事実です。

この「**E**」にいたる手前の「**F**」段階が、グラムシのいう「病的な兆候」ではないでしょうか。では、「災間」についてはどのような病的な兆候が考えられるか。近年の被災地で見られるようになってきた気になる風景から見てみましょう。

昨今、災害から時間が経過しているのにあまり変化がないような被災地が散見されるようになりました。これまでであれば、時間とともに、被害を受けた建物が解体されて、更地になって、新しい建物が建つとか、すこしずつ修復が進むなどの変化があったのが、二年たっても三年たっても、被災直後とあまり様子が変わらないのです。地震から数年たつのに、屋根の修理ができていないのか、ブルーシートがかかったままだったり、水害時の泥が入ったままになっていたり。

このような、災害から時間がたってもあまり風景が変化しない、なかなか復興の姿が見えない被災地を「復興しない被災地」と呼びたいと思います。なぜ復興しないのか。理由のひとつとして、職人さんが減ってしまっただけでなかなか手がまわらないことがあります。たしかに、建設業にたずさわっている人の数はどんどん減っています。被災地で、「屋根の修理を頼んでいるけど、業者さんも忙しいみたいで、いつになるかわからなくて」という声をよく聞きますが、職人さんが少ないというのも事実のようです。ただ、それだけでは説明がつかない「復興しない被災地」もあります。

二〇一七年の九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市の事例です。この災害は、国の激甚災害指定を受けることになりました。この指定を受けると、農林水産省の事業の適用で国が工事費の九割程度を負担、残りの一部を市町村も負担してくれるので、農家は自己負担をおさえて農地の復旧が可能になるそうです。非常に高い補助率ですから、多くの農家が朝倉市に事業の適用を申請しました。ところが、朝倉市は国の申請期限までに必要な書類の作成が間にあわずに、結果、多くの農地が国の補助適用の対象外になってしまったのです（国の事業ですが、窓口は朝倉市になっていたのですね）。

なぜ間にあわなかったのか。農家は人的被害や家屋被害への対応のほうが先で、農地のことは後になるだろうと考えて、朝倉市は申込期限を延長したんです。すると、その延長期間に申し込みがサットウ^dしてしまい、現地確認に手がまわらなくなり、国への書類提出が間にあわなかったというのです。

補助対象から漏れてしまったのは農地と農業用施設をあわせて七八〇件。もちろん、これは農家ではなく朝倉市のミスですから、朝倉市は独自の予算で補助を支払うと伝えたのですが、工事の時期は不明のまま時が過ぎたといっています。結果、一〇〇件近くについて、農家は復旧を諦めたということです。

行政の手続きが間にあわずに事業適用ができなかったなんて、かつてであればとても考えられなかった問題ではないか
と思います。なぜこのような問題がおきたのか。朝倉市の事例から推察されるのは、行政機能の縮小です。

地方公務員数は、ピークであった一九九四年に比べて、一五・九パーセント減少しています。行財政改革の名のもと、特に二〇〇〇年代前半に地方公務員数が大幅に減少したのです。少ない人数でも効率的に業務をまわせるようにする、というのは、言い換えると、平時の業務量にあわせてたぎりぎりの運営をしているということです。すると、大きな災害がおきてしまつて一気に業務量が増えると、とてもまわせなくなる。昨今の「復興しない被災地」の背景には、このような行財政改革の影響による行政機能の縮小もあると考えられます。

しかし、どうもそれだけでもないようなのです。というのも、朝倉市の事例は、^e語弊があるかもしれませんが、⁴まだ「良心的」な事例なのです。なぜなら、朝倉市の判断は、被災者のおかれた状況をおもんばかつて配慮したことが裏目に出てしまったから、つまり朝倉市は「復興させよう」とはしていたわけです。ところが、昨今の「復興しない被災地」のなかには、あろうことか、そもそも「復興しよう」「再建しよう」という姿勢やかかわりが見られないものがあるんです。

二〇一八年の西日本豪雨のある被災地でのことです。私は直後から現地に入って、泥かきのお手伝いをしながら被災者の方のお話をうかがってまわっていました。まず目についたのは、集会場の前や四つ角に、石灰がただおかれていて、それを被災者の方がまだ乾燥もしていない泥だらけの床下に、無造作にまいていたことでした。

浸水した家屋について、まずもって重要なことは徹底的に乾燥させること、そして消毒することです。湿気を残したままにすると、カビが発生してしまいます。それが壁の間の断熱材などに入ると数年後には家中がカビだらけで大変です。床板をはがして、徹底的に乾燥させて、消毒することが大切です。石灰は消毒用におかれていたようなのですが、乾燥させてから消毒するということが知られていないようでした。

また、床上浸水のおうちは、家中が泥だらけなので、家具を搬出して、畳をあげてと対応がなされていたのですが、床下浸水のおうちのなかには、「うちは床下だし、もう水もひいたし大丈夫かな」と、特になにもせずに日常に戻ろうとさ

れているところもありました。

どうも水害後の基本的な処置の方法が知られていないようなので、これはまずいと思い、行政や災害ボランティアセンターにこのことを伝え、水害後の対応をまとめた冊子を配布してはどうかと提案しました。すると、冊子は「すでにあるよー」とのことでした。たしかに、災害ボランティアセンターの受付の後ろに山積みになっています。それはよかったと安心したのですが、何日たってもいっこうに配られる気配がありません。そうこうしているうちに、近隣の災害ボランティアセンターがそろそろ閉鎖するらしいのでうちもという声もあがってきました。

どうして冊子が配られないのか、運営の支援に入っていた知りあいにそれとなくたずねてみると、「あの冊子を配ると、床下のことまでボラセン（災害ボランティアセンター）がやってくれるのか、役場がみてくれるのかと思われて、そうするとそこまでやりきれないから、積極的には配布できないらしい」という驚きの返事が返ってきたのです。知らぬが仏、臭いものに蓋ならぬ「床板」です。床下浸水なら見えないんだし、困ってるって言っていないんだからもういいんじゃないかと。

この事例からいえるのは、昨今の「復興しない被災地」のなかには、そもそも復興させようという姿勢がない、というか、被災という問題自体を見ようとしないう態度があることです。人員削減だし、ただでさえ仕事もたくさんあるし、下手に支援しようとしても結局手がまわらずにかえって混乱を招く恐れもあるし。ならば、はじめから対象を限定したり、そもそも被災した事実を「見なかったことにする」、そんな現象がおきつつあるのです。

「見なかったことにする」に関連して、「**G**」もあります。たとえば、近年は、災害ボランティアセンターの開設の遅れが目立ちます。被災して二週間たってようやく開設されたかと思えば、一か月で閉鎖されることも珍しくありません。さまざまな平常業務があるのに、災害ボランティアセンターの運営を続ける余力はない、けれど災害ボランティアセンターを立ちあげない、ということもできないので、なんとか二週間かけて立ちあげて、あとは積極的にニーズを聞きとるということをせずに縮小させていくのです。

(宮本匠『みんな』って誰?』による)

注1 SARS……二〇〇二年から二〇〇三年にかけて確認された重症急性呼吸器症候群。

注2 MERS……二〇一二年以降中東地域で広く発生している重症呼吸器感染症。

注3 災害ボランティアセンター……被災地に開設され、ボランティアと被災者のニーズをマッチングすることで、災害ボランティアの活動をより効率的にすることを目的とした組織。

問一

——線部 a ～ e の漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号は a

16

b

17

・ c

18

・ d

19

・ e

20

。

問二

——線部1『コロナ後』の社会に世間の関心は移動していた」とあるが、それはどのようなことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

21

。

- ① コロナウイルスをきっかけに、コロナ前の社会生活の課題が改善されるのを期待すること。
- ② 災害も毎年のように起きており、災害対策を通じて前向きに感染症を克服しようとする事。
- ③ コロナウイルスが収束した後に、次の感染症の流行がいつ発生するのか心配すること。
- ④ コロナウイルス感染症に罹患した後の生活支援はいつまで継続されるのか心配すること。

問三

空欄

A

・空欄

B

・空欄

C

・空欄

D

に入る語の最も適切な組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① A そうすることでは B では C つぎに D たとえば
- ② A したがって B それでは C 同じように D だが
- ③ A つまり B まずは C ここで D しかし
- ④ A それゆえ B そして C そして D また

問四

――線部2

『災間』

は、『戦間』

になぞらえた表現

とあるが、

どういうことか。

説明として最も適切なものを、

次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

- ① 戦間とは主に第一次と第二次世界大戦の間の歴史を指す言葉だが、日本でも今後災害と災害の間を歴史的に説明する必要があるということ。
- ② 戦争同様に災害もくりかえし起こる可能性があるため、災害の後と考えるのではなく、災害と災害の間として捉える必要があるということ。
- ③ 戦争のあとに人類が「戦争はよくない」と考えたように、災害も人類共通の問題として考える必要があるということ。
- ④ 第一次世界大戦のあとのように、災害後も人類の連帯へと向かうユートピア的な気分が起こるということ。

問五

空欄

E

に入る二字の語を本文中より抜き出すとともに、

空欄

F

に入る適切な漢数字を記しなさい。解答

番号は 24。

問六 — 線部3「復興の姿が見えない被災地」とあるが、それが生じる原因として、筆者が最も問題にしているのはどのようなことか。それを本文中より二十字以上二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ記しなさい。

句読点や記号も一字に数えます。解答番号は 25。

問七 — 線部4「まだ『良心的』な事例」とあるが、どのような点で「良心的」と言えるのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26。

- ① 行財政改革によって、地方公務員を削減して、少ない人数でも効率的に業務をまわせるようにした点。
- ② 農家の事情を考慮したために国への提出が間にあわなかったものの、被災した農地の復旧申請の対応はしようとしていた点。

③ 行政のミスで申請できなかった農地復旧の補助事業分を、市の独自予算で支払おうとした点。

④ 工事時期が不明であったものの災害による農地の復旧を諦めたのは農家自身であって、行政の責任ではない点。

問八 — 線部5「これはまずいと思い」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27。

① 床下浸水した家屋の床板をはがして、乾燥と消毒をさせていたから。

② 住民が床上浸水した家屋を乾燥させる方法をよく知らないから。

③ ボランティアセンターがそろそろ閉鎖されるらしい話が聞こえてきたから。

④ 住民が浸水した床下に石灰をそのままく等、水害の対策が知られていないから。

問九 ―線部6「知らぬが仏」とあるが、この表現の意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 28。

- ① 知らない方が心を乱されずにいられること。
- ② 知らない人にこそ問いかけ、教えることで徳が積めること。
- ③ 物事を知らない人こそ大事にした方がいいこと。
- ④ 自分の無知を自覚することで仏に近づけるさま。

問十 空欄

29。

G

に入れるのに最も適切な言葉を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。 解答番号は

- ① 言い訳や釈明をする
- ② やったことにする
- ③ 人まかせにする
- ④ なかったことにする

問十一 本文の内容と合致していないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

- ① 復旧方法の冊子を行政は作成することはできても、復旧の対応は被災者自身の力でやる以外に方法はない。
- ② 行財政改革で公務員が削減され、災害ボランティアセンターを立ちあげることではできても、運営を続けられない事例が増えている。
- ③ 「死の受容」のように「抑鬱」を乗り越えるためには、災害も「復興しない被災地」という被災の問題自体に目を向けなくてはいけない。
- ④ 災害はくりかえし起こるものであり、新しい災害に向き合うための価値や制度がまだ存在しない空白期のことを「災間」という。